

第三章 神の永遠のご計画について

第七節（一）「神の義と遺棄の教理」

第三章第七節へ進みましょう。ここはウェストミンスター信仰告白の中でも、最も慎重に取り扱わなければならない箇所の一つです。これまで第三章では、神が永遠のご計画の中で、御自分の恵みによって人を選び、キリストによって救いへ導いてくださることを学んできました。第七節では、選びとの対照において「遺棄」について語られます。しかし、ここで最初にはっきり確認しておきたいことがあります。ウェストミンスター信仰告白は、遺棄を予定論の中心に置いてはいません。第三章全体を見れば明らかなように、多くの節は神の救いの恵みについて語られています。第七節は、その神の恵みを語る中で、神の公義についても沈黙しないために置かれている節なのです。ですから、私たちもこの節を、恐れや好奇心からではなく、神への畏敬をもって学びたいと思います。

一 遺棄とは何を意味するのでしょうか

「遺棄」という言葉は、日常生活ではほとんど用いられません。しかし、改革派神学では古くから用いられてきた神学用語です。ここで重要なのは、その意味を誤解しないことです。第七節が語る遺棄とは、神が罪のない人を気まぐれに滅びへ追いやることではありません。神が、選ばれなかった者をその罪のゆえに恥辱と神の怒りに定められることを、公正な裁きとして告白するものです。したがって、遺棄は神の公義と切り離して理解できません。アブラハムがソドムのために執り成したとき、「全世界を裁く方は、公平を行われるべきではありませんか」（創世記 18・25）と語りました。聖書の答えは一貫しています。神は常に正しく裁かれる方です。この確信の上に、第七節も立っています。

二 神の義を人間の尺度で量ることはできません

私たちは「なぜ」という問いを抱きます。「なぜある人は福音を聞き、ある人は聞かないのか」「なぜ同じ説教を聞いても、受け入れる人と拒む人がいるのか」。こうした問いは、古代教会以来、繰り返し問われてきました。しかし、信仰告白は、この問いに人間の理性だけで答えようとはしていません。むしろ、パウロがローマ書九章で語るように、「人よ、神に言い逆らうあなたは、一体何者ですか」（ローマ 9・20）という姿勢へ私たちを導きます。これは思考停止を求めているものではありません。神を神として畏れる信仰の姿勢を教えているのです。神の義は、人間の基準で裁かれるものではありません。私たちは神を裁く者ではなく、神の御前に立つ者です。

三 遺棄の教理は福音の光の中で読む

ここで忘れてはならないことがあります。第三章第七節だけを切り離して読めば、この教理は重苦しく感じられるかもしれません。しかし、ウェストミンスター信仰告白は、第七節だけで終わりません。続く第八節では、この教理を**敬虔さと慎重さをもって取り扱うべきこと**が語られます。また、第三章全体を通して見れば、中心にあるのは遺棄ではなく、神の救いの恵みです。ですから、私たちは第七節を読むときも、常にキリストを見つめます。福音書のイエスは、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい」（マタイ 11・28）と招いておられます。この招きは、誰に対しても真実です。教会が宣べ伝えるべきなもの、この福音です。遺棄について思索することではなく、キリストを証しすることが教会の使命なのです。

四 神は罪の作者ではありません

第七節を読むとき、必ず確認しなければならないことがあります。それは、**神は罪の作者ではない**ということです。これは第三章第一節ですでに確認した大切な原則でした。神は永遠の昔からすべてを御心のままに定められました。しかし、それは神が悪を造られたという意味ではありません。また、人間を無理やり罪へ追いやられるという意味でもありません。聖書は繰り返し、人間が自ら神に背き、罪の中にあることを語っています。ヤコブはこう言います。「神は悪の誘惑を受けるような方ではなく、また御自分でもだれをも誘惑しません」（ヤコブ 1・13）。改革派神学が遺棄を語るときも、この聖書の原則は決して揺らぎません。神は聖なるお方です。罪は人間の責任であり、神はその罪を義をもって裁かれます。この点を離れると、遺棄の教理は聖書から離れてしまいます。

五 神の義は神の憐れみと対立しません

私たちはしばしば、神の義と、神の愛とは、互いに反対のもののように考えてしまいます。しかし聖書ではそうではありません。十字架を見れば、それがよく分かります。神は罪を見過ごされませんでした。だからキリストは十字架につけられました。しかし同時に、神は罪人を愛してくださいました。だから御子を世に遣わしてくださいました。ローマの信徒への手紙は「神は御自分の義を示された」（ローマ 3 章）と語ると同時に、「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」（ローマ 5・8）とも語っています。神の義と神の愛は、十字架において一つになります。ですから、第七節を読むときも、神の公義だけを取り出して考えるはなりません。私たちは常に十字架を見つめます。

六 遺棄の教理は神を恐れる信仰へ導きます

今日、「神を恐れる」という言葉はあまり使われません。しかし聖書では、神を恐れることは、神から逃げることではありません。神を神として敬うことです。予定について学ぶと、私たちは神の御業の大きさに圧倒されます。人間には測ることのできない知恵があります。永遠の昔から終わりの日まで歴史を導かれる御手があります。その前に立つとき、私たちは自分の知恵を誇ることができません。ヨブは神の語りかけを聞いたあと、「わたしは塵と灰の上に伏し、自分を退け、悔い改めます」（ヨブ 42・6）と言いました。遺棄の教理も、私たちが議論好きな神学者にするためではありません。神の前にへりくだる者とするためです。

七 教会が語るべきこと

ここで最後に、教会の使命について考えたいと思います。教会は、遺棄を宣べ伝えるために存在するものではありません。教会が宣べ伝えるのは、イエス・キリストの福音です。使徒たちは、人々に隠された選びを詮索させるのではなく、悔い改めて福音を信じるよう呼びかけました。ペンテコステの日には、ペトロが悔い改めを促しました。また、フィリピの看守に対して、パウロとシラスは「主イエスを信じなさい」（使徒 16・31）と語りました。これが教会の宣教です。予定は神の秘密です。福音は神が世界に公に示された招きです。教会は、この招きを大胆に語り続けます。その結果を神に委ねることが、改革派教会の信仰です。

歴史神学コラム カルヴァンは遺棄をどこで語ったか

カルヴァンは『キリスト教綱要』第三巻で予定論を論じますが、その目的は遺棄を詳しく説明することではありませんでした。彼が繰り返し警告するのは、「神の隠れた御旨」を詮索する危険です。信仰者が見るべきなのは、天に隠された神の会議ではなく、福音書に現れたキリストです。この姿勢はウェストミンスター信仰告白にも受け継がれています。遺棄を語る節が簡潔であり、その直後の第八節で「この教理は特別な慎重さと配慮をもって取り扱われるべきである」と勧められるのは、そのためです。

八 神の沈黙を尊重する信仰

第七節を学び終えるにあたり、心に留めたいのは、神が聖書において示されたことには大胆に聞き従い、示されていないことを人間の推論で補わないという姿勢です。遺棄の教理は、私たちの好奇心を満たすためではなく、神の前に立つ人間の限界を教えるために置かれています。だから私たちは、神の秘密を詮索するのではなく、キリストにおいて明らかにされた福音に聞き従います。

九 私たちが見つめるべきはキリストです

遺棄という教理を学ぶとき、信仰者はどこを見つめるべきなのでしょう。答えは明らかです。イエス・キリストです。ヨハネによる福音書には、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（ヨハネ 3・16）とあります。また、「わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない」（ヨハネ 6・37）とも約束されています。これが教会の語る福音です。私たちは、人々に向かって「あなたは遺棄されていないだろうか」とは語りません。そのようなことを語った使徒は一人もいません。教会は、「キリストはあなたを招いておられる」と語ります。そして、「悔い改めて福音を信じなさい」と招きます。これが聖書の宣教です。

十 神の秘密は神に委ねます

ここで、モーセの言葉を思い起こしましょう。「隠されている事柄は、我々の神、主のものである。しかし、現された事柄は、永遠に我々と我々の子孫のものであり、この律法の言葉をことごとく行うためである」（申命記 29・28）。この御言葉は、予定論全体を読む鍵でもあります。神には、隠された御旨があります。しかし神は、それとは別に、私たちが従うべき御言葉を与えてくださいました。信仰者は、隠された御旨を知ろうとすることより、現された御言葉に従うことを求められています。だから教会は、神の秘密を論じる共同体ではありません。御言葉を聞き、御言葉に従う共同体です。

十一 神の公義は礼拝へと導きます

第三章第七節を読み終えるとき、私たちの心に残るべきものは恐れではありません。畏敬です。神は義なるお方です。神は聖なるお方です。神は真実なお方です。そして、その神が、キリストにおいて私たちを愛してくださいました。この驚きが、礼拝を生み出します。パウロは予定について語り終えたあと、神学的な結論ではなく、賛美をささげました。「ああ、神の富と知恵と知識とのなんと深いことか。その裁きはなんと窮めがたく、その道はなんと尋ねがたいことか」（ローマ 11・33）。これが第三章第七節の終着点です。私たちもまた、神を理解し尽くした者としてではなく、神を礼拝する者として歩み続けたいと思います。

歴史神学コラム 「遺棄」を語ることと、「遺棄」を語りすぎないこと

改革派教会は、歴史を通して「遺棄」の教理を否定してきませんでした。それは聖書が語っているからです。しかし同時に、改革派教会はこの教理を必要以上に詳述することにも慎重でした。カルヴァンは、神の隠れた御旨を詮索することを戒めました。ウェストミンスター信仰告白も、第七節で遺棄に触れた直後、第八節で「この教理は特別な慎重さと配慮をもって取り扱われるべきである」と勧めます。日本キリスト改革派教会もまた、創立五十周年記念宣言「予定についての信仰の宣言」を採択する過程で、この問題を真剣に検討しました。

その歩みは、遺棄を軽視したということではありません。むしろ、聖書と信仰告白に忠実でありながら、この教理を**牧会的責任をもって語る**という姿勢を改めて確認した歩みであったと言えるでしょう。

第七節のまとめ

第三章第七節は、神の公義を静かに告白する節です。しかし、その目的は、人間に裁きについて思索させることではありません。神の義を認め、神の秘密を神に委ね、私たちには福音として与えられたキリストを見つめ続けることです。だから教会は、遺棄を中心に語るのではなく、**十字架と復活の福音**を中心に語ります。そして神の裁きは神に委ね、神の招きはすべての人に誠実に宣べ伝えます。これが改革派教会の伝統であり、ウェストミンスター信仰告白第三章第七節が私たちに教えている信仰の姿勢なのです。

第八節（一）「予定の教理をどのように学ぶべきか」

続いてウェストミンスター信仰告白第三章の最後、第八節を学びます。ここまで私たちは、神の永遠の聖定について学んできました。神は永遠の昔から御自分の御心のままに万事を定められました。その中で、神は恵みによって御自分の民を選び、キリストにあって救いへと導かれます。また第七節では、神の義の現れとして遺棄についても学びました。しかし、信仰告白はそこで終わりません。最後に、「この教理をどのような態度で受け止めるべきか」を語ります。ここに、この信仰告白の深い牧会的配慮があります。

一 正しい教理にも正しい受け止め方がある

私たちは時として、「教理が正しければ、それで十分だ」と考えてしまいます。しかし、聖書はそう教えてはいません。同じ真理でも、それを高慢に受け取る人がいます。あるいは、不安に陥る人もいます。他人を裁く材料にしてしまう人もいます。ですから、教理には「何を信じるか」だけでなく、「どのように信じるか」があります。第八節は、まさにそのことを教えています。予定の教理は、人を議論好きにするために与えられたものではありません。神への礼拝へ導くために与えられました。

二 神の隠れた御旨と現された御言葉

ここで信仰告白は、私たちに一つの大切な区別を教えます。それは、**神の隠れた御旨**と、**神が聖書において現してくださった御旨**との区別です。神は永遠のご計画のすべてを、私たちに知らせてはられません。人類の歴史のすべてを、神がどのように導いておられるのか、私たちは知ることができません。しかし、神は救いに必要なことを、聖書において十分に示してくださいました。だから私たちが従うべきなのは、神の秘密ではなく、神の言葉です。

申命記には、「隠されている事柄は、我らの神、主のもとにある。しかし、啓示されたことは、我々と我々の子孫のもとにとこしえに託されており、この律法の言葉をすべて行うことである」とあります。この御言葉は、第八節全体を理解する鍵になります。私たちは、神の秘密を解き明かす者ではありません。神の御言葉に聞き従う者です。

三 予定論は推理ではなく礼拝へ導きます

レジュメに記した解説の中で印象に残るのは、予定の教理は「必要以上に詮索しないことが肝要である」という指摘でしょう。人間はどうしても説明し尽くしたくなります。しかし、説明し尽くせないところで神を神として礼拝すること、それが信仰です。パウロもローマ書九章から十一章で予定について深く論じたあと、最後は議論ではなく賛美で締めくくります。「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか」。これが改革派神学の姿勢です。理解できたから礼拝するのではありません。神が神であられるから礼拝するのです。

四 予定の教理は救いの確信を与えます

ここで信仰告白は、予定の教理の第一の実りとして、**救いの確信**を語ります。この教理は、御言葉に聞き従い、自らの有効召命の確実性に意を注ぐ者が、自分の永遠の選びを確信するために、特別な慎重さと配慮をもって取り扱われるべきものです。この順序は、とても大切です。私たちは天にある神の秘密の書をのぞき込んで、自分が選ばれているかどうかを知るのではありません。むしろ、今、自分がキリストを信じ、神を「父よ」と呼んで祈り、罪を悲しんで神に立ち返ろうとしていることの中に、聖霊による召しの確かな証拠を見るのです。**有効召命は、私たちを確実に永遠の救いへ導く神の御業**です。ですから予定の教理は、神が最後まで救いを完成してくださるという、揺るがない慰めを与えます。

五 救いの確信は神への賛美となる

では、この教理を正しく受け止めた人には、どのような実りが生じるのでしょうか。信仰告白は、その最初に、**神への賛美、畏敬、賛嘆**を挙げています。これは偶然ではありません。予定論を学んで最初に生まれるのは、「私は選ばれている」という誇りではなく、「神はなんとという恵み深いお方だろう」という賛美です。パウロはエフェソ書で、神の永遠の選びを語ったあと、神の輝かしい恵みをたたえるためであると述べています。予定の教理は、私たちの心を自分自身ではなく神へ向け、礼拝へと導くのです。

六 謙遜と熱心

信仰告白は続けて、予定の教理は「**謙遜と熱心**」を生み出すと言います。もし救いが私たちの功績によるなら、私たちは互いに比較し、自分を誇るでしょう。しかし、すべてが恵みに

よるのであれば、誇る理由はありません。私たちは神の前でへりくだります。しかし、その謙遜は消極的なものではありません。神が私たちを最後まで導いてくださるという確信は、神に仕える勇気を生みます。神は私たちの出来・不出来によらず、御自分の救いの御業を最後まで完成してくださいます。だからこそ、私たちは大胆に福音を語り、大胆に教会に仕え、大胆に祈ることができます。

七 豊かな慰め

信仰告白が最後に掲げる実りは、「**豊かな慰め**」です。予定の教理は、**自分や隣人の救い**を推測して**不安になるためのもの**ではありません。神が御自分の民を必ず救われるという約束だからこそ、教会は安心して福音を宣べ伝えることができます。福音を伝える務めを忠実に果たし、その結果を神の御手に委ねることができるのです。ここに、第三章全体を貫く牧会的な慰めがあります。

第三章の結び

第三章は、「**神の永遠の聖定**」という題を掲げています。しかし、ここまで学んできて分かることは、この章が本当に語っているのは、**神の恵みの確かさ**です。父なる神は、永遠の昔から、キリストにあって御自分の民を愛してくださいました。御子はその民のために十字架にかかけられました。聖霊はその民を有効に召し、信仰を与え、義と認め、神の子とし、聖なる者へと造り変え、最後まで守り導いてくださいます。この神の救いの御業の全体像が、第三章に語られている予定の教理です。ですから、私たちは神の秘密を詮索するものではありません。神がキリストにおいて現してくださった恵みを信じ、神を賛美し、神を畏れ、神に仕え、そして大胆に福音を宣べ伝えます。それが、ウェストミンスター信仰告白第三章が、四百年近くにわたって教会に語り続けてきたメッセージなのです。

第三章総括「神の永遠の聖定——神の恵みへの賛美」

私たちは長い時間をかけて、「神の永遠の聖定」について学んできました。この章は、ウェストミンスター信仰告白全体の中でも最も難しい章の一つと言われます。「予定」という言葉を聞くだけで、不安を覚える人もいるでしょう。「自分は本当に選ばれているのだろうか」「家族は救われるのだろうか」「伝道しても、すべて予定されているなら意味がないのではないか」、そのような疑問は、昔から繰り返し語られてきました。しかし、私たちはこの章を最後まで読んで、もう一度問い直したいと思います。本当にウェストミンスター信仰告白は、そのようなことを語ろうとしていたのでしょうか。

一 第三章の中心は「予定」ではなく「神」です

第三章を振り返ると、一つの特徴があります。どの節にも共通している主語は、「神」です。神が定められました。神が選ばれました。神が召されました。神が義とされました。神が最後まで守ってくださいます。反対に、人間はどうでしょうか。人間は常に受け取る者です。神の恵みを受け、神の召しを受け、神の赦しを受け、神の命を受けます。つまり、この章は人間についての章ではありません。**神についての章**なのです。ここを見失うと、予定論は運命論になってしまいます。しかし、神を中心に読むとき、この章は恵みへの賛歌となります。

二 予定とは、神の愛の永遠性です

第三章で語られる予定は、冷たい運命ではありません。父なる神は、世界が造られる前から、御子イエス・キリストにあって、御自分の民を愛してくださいました。それが予定です。ですから、予定はまず、「誰が救われ、誰が救われないか」という議論ではありません。それ以前に、神の愛には始まりがないという福音です。エフェソの信徒への手紙一章は、「天地創造の前に、神はわたしたちをキリストにおいてお選びになりました」と語ります。この御言葉が示すのは、私たちの信仰よりも先に、神の愛があったという事実です。私たちが神を愛したからではありません。神が先に私たちを愛してくださいました。この順序こそ、第三章全体を理解する鍵です。

三 予定は教会を福音宣教へ向かわせます

第三章を学んで、「それなら伝道は必要ない」という結論になるのでしょうか。決してそうではありません。第五節、第六節で学んだように、神は目的だけでなく、**その目的を実現する手段**も定めておられます。その手段の中心が、福音の宣教です。神は人を救われます。しかし、神は教会の証しを通して救われます。パウロは、「信仰は聞くことから始まる」と語りました。だから教会は語ります。予定を知っているからではありません。神が語れと命じておられるからです。結果は神に委ねます。しかし、福音を語る責任は、教会に委ねられています。この確信は、私たちを消極的にするものではありません。むしろ大胆にします。神の御業は、決して空しく終わることがないからです。

四 予定は慰めの教理です

第三章の最後、第八節では、予定の教理は、神への賛美、畏敬、賛嘆、謙遜、熱心、そして豊かな慰めを与えると教えられました。この順序も大切です。予定は、人を不安にするためではありません。人を慰めるためにあります。信仰生活には、弱さがあります。罪があります。失敗があります。しかし、そのような私たちを、神は最後まで見捨てられません。神が始められた救いは、神が完成してくださいます。ここに、信仰者の平安があります。

五 遺棄をどう受け止めるべきか

第七節では、遺棄についても学びました。しかし、第三章全体を読み終えると、その位置づけがよく分かります。信仰告白は、遺棄を詳しく論じません。むしろ、神の義を静かに告白するにとどめています。そして、その直後に、この教理を慎重に取り扱うよう勧めています。これは大切な姿勢です。私たちは、神の義を信じます。しかし、神の秘密を詮索しません。私たちは、キリストに示された神の恵みに目を向けます。教会が語る中心は、遺棄ではなく、福音です。

六 予定論は礼拝へと導きます

ローマ書九章から十一章で、パウロは予定について深く語りました。しかし、最後に彼がしたことは、議論ではありません。礼拝でした。「ああ、神の富と知恵と知識とのなんと深いことか。その裁きはなんと窮めがたく、その道はなんと尋ねがたいことか」（ローマ 11・33）。これが、第三章全体の結論です。私たちは、予定論を理解したから神を礼拝するものではありません。神があまりにも大いなるお方であることを知るから、礼拝するのです。神学は、礼拝へ至る道でなければなりません。もし神学が高慢を生み出すなら、それは神学ではなく、知識にすぎません。しかし、神学が神への畏敬を生み出すなら、それは信仰となります。

結び

第三章を読み終えた今、私たちは予定論を学び終えたというより、**神の恵みの深さを少しだけ教えられた**と言うべきでしょう。永遠の昔から、父なる神は御子にあって私たちを愛してくださいました。御子はその愛を十字架によって現してくださいました。聖霊はその救いを私たち一人ひとりに適用してくださいました。そして神は、終わりの日まで私たちを守り抜いてくださいます。これが、第三章が私たちに告白させる信仰です。だから私たちは、未来を恐れる必要はありません。神の恵みを信じ、神を礼拝し、福音を大胆に宣べ伝え、与えられた務めに忠実に歩み続けます。その歩みを支えてくださるのは、私たちの決意ではなく、永遠から変わることのない神の恵みなのです。